

## 所有物全品収集：民博所蔵大村しげコレクション 収集の経緯と特徴

著者	笹原 亮二
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	68
ページ	17-21
発行年	2007-03-26
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00001434">http://doi.org/10.15021/00001434</a>

# 1. 所有物全品収集

——民博所蔵大村しげコレクション収集の経緯と特徴——

笹原 亮二

## 1 所有物を丸ごと収集する試み

2000（平成12）年4月、国立民族学博物館は、京都市中で長年暮らしてきたひとりの女性の家の中にあったすべての物品の収集を行った。かつて考現学を提唱し、自らも様々なかたちでその実践を試みた今和次郎は、ある家庭に存在するすべての物品や個人が所有するすべての物品を図示して書き上げる悉皆的な調査を行ったが（今1971: 345-386）、その収集はそれに想を得たものであった。当時収集を担当した筆者の考えでは、今の所有物全品調査を博物館資料の収集というかたちで試みたものであった<sup>1)</sup>。その女性とは大村しげ<sup>2)</sup>であり、収集した物品が、この程整理が完了した民博所蔵大村しげコレクションである。

## 2 収集の実際

大村しげの家に残された遺品を寄贈したいという申し出を彼女の関係者から民博が受けたのは、彼女が亡くなって2、3ヶ月後のことであった。その申し出の内容は、彼女が使用していた台所用品を中心に、可能な限り多くのものを寄贈したいというものであった。それを受けて、筆者ら民博のスタッフが実際に彼女の家に伺ったところ、亡くなってから暫く経っていたが、どの部屋も家財道具の散逸が認められず、生前の状態がほぼ保たれているように思われた。そこで、関係者と民博側とで改めて協議し、基本的には各室内にある物品を可能な限りすべて寄贈してもらうことにしたのである。

実際の資料の収集は諸般の事情で遅れ、借家の明け渡し期限が迫った2000（平成12）年4月のことであった。収集作業は、先ず家の間取りの実測と大型の家具の位置の記録を行った上で<sup>3)</sup>、一部屋ずつ順番に、物品の埃を払い、梱包して運び出し、トラックに積み込んで民博に搬送するというかたちで進めた。初めのうちは、収集に立ち会ってもらった彼女の関係者から、それぞれの入手経路や使用状況といった履歴を聞き取りながら作業を行っていた。しかし、残された物品の量が膨大なことが判明し、予定していた2日の作業期間を1日延長したにも関わらず作業が終わりそうになくなったので、途中からは聞き取りを中止し、置かれていた部屋を記録したら、埃も払わず梱

包して運び出して、ようやく完了にこぎ着けたのであった。民博に運んだ物品は、最終的に2トントラック5台分に及んだ。

彼女の住居は、1階が3部屋に台所、2階が4部屋、地下室から成っていて、1人で暮らすには十分すぎる広さである。約20年間両親と同居していた期間があったものの、基本的には1人暮らしであったということで、家の中に残されたものの量もそう多くはないであろうと考え、家中のものをすべてもれなく収集することにしたが、予想は見事に裏切られたのは前述の通りである。

この時の収集は、前述のように、基本的には彼女が所有していたすべての物品の収集を企図したものであったが、和服や装身具や電化製品など、民博の収集の前に親族や生前の関係者に既に引き取られた品々があって、厳密に言えば完璧な全品収集は適わなかった。しかし、その時点で家の中に残されていた物品については、漬け物石から襖や引き戸に至るまで相当程度徹底的に収集を行ったので、当初の目的は基本的には達成できたと考えている。

### 3 資料の特徴

収集した資料の特徴として挙げられるのは、先ず第一にものの量が多いことである。資料の総数は約1万5千件、数量はその数倍に及ぶ。何故これだけたくさんのもので残されたのかといえば、彼女がとにかくものを捨てなかったからにほかならない。彼女が学生時代に使用した学用品は箱や説明書きと一緒に残っていたし、長年使用してきたミシンも、修理部品や付属の工具から説明書に至るまで見事に揃っていた。また、使い込んで2cmにも満たなくなった鉛筆や空になった食品容器といった、通常我々ならば捨ててしまうようなものも大量に残されていた。

このことは、大村しげという個人の性癖として理解することも可能である。しかし彼女が、祖母や母親からものを大事に扱い、後始末をきちんとする「しまつ」をきっちり教え込まれ、それを頑なに守ってきたと述べている（大村 1997: 212）ことを考えると、それは、京都独特の生活感覚や価値観という地域性、物品の所有や使用を巡る京都の人々の意識のありようといった枠組みで理解することも可能かも知れない。

次に注目したい点は、彼女個人の生活と時代や世相との関係である。彼女は、昔から伝えられてきた京都の庶民の文化や知恵を高く評価し、自らもそれを実践し、文筆活動などを通じて精力的に紹介してきた。そのせいもあって、一般の人々が抱く彼女のイメージは、さながら京都の伝統的な生活文化の体現者といったところであろう<sup>4)</sup>。事実、筆者が最初に彼女の家を訪れた際も、家の中には昔ながらの竈や掘り炬燵が設けられ、仏壇や和筆筒や鏡台が並んでいて、一見そうしたイメージ通りに感じられた（笹原 2002）。

しかし、実際に収集された資料を見てみると、それに合致しないものが少なからず含まれていた。例えば、戦前に満州の知人から送られてきた旧日本軍の写真の絵葉書、戦時中に本物の餅が手に入らず布と綿でかたちだけ作ったイミテーションの鏡餅、非常用食料保存容器などを初め、太平洋戦争の時期の厳しい生活や世相を反映したものがいろいろ残されていた。また、彼女が日頃使用してきた生活用具類にも、必ずしも伝統的とはいえないものがかなり混じっていた。電話や電気冷蔵庫などの電化製品はもちろんのこと、和服や食器や調理器具といった、一見用途や形態に伝統的な特徴が残っている物品類においても、工業的な大量生産品やプラスチックなどの合成素材を使用したものが相当数見られた。これらは、彼女の暮らしもやはり、紛れもない「現代」のものであったことの証拠といえる。

こうした彼女の生活意識や彼女のイメージと実際に彼女の家に残されたものとの齟齬を考えると、生活文化を論じる際の物質文化的な観点からの検討の重要性が改めて納得されてくる。物質文化的な視点を欠いた議論は、生活実態との関係が希薄で具体性に欠けたものになりがちである。議論を生活実態にきちんと繋ぎ止めておくためにも、生活現場に存在するもののありようを詳細に見ていくことが重要となるはずである。

また、生活の近代化や現代化を論じる際にも、物質文化的な視角は一定の有効性が認められるのではないだろうか。この種の問題は、論者自らの生活体験と不可分なこともあって、印象論的資料提示に基づく個人的な見解の応酬に終始し（福田 1992: 11）、議論の深化が疎外される場合が少なくない。そこで、具体的な資料、つまり、実際のものありように立脚した物質文化的視角からの検討を行うことで、そうした状況の打開が可能になることも期待できるのである。

## 4 個人情報としての資料

長年博物館で調査研究や資料収集に従事したとしても、ある人物の人生や生活全般に関わる品々を全品まとめて収集できる機会に遭遇するのは極めて稀である。たとえ遭遇できたとしても、十分な規模と体制を有する機関でなくては実際に収集を行うことは難しい。そうしたことを考えると、民博が収集した大村しげコレクションは、20世紀の生活文化の具体的な記録として、また、生活現場から歴史や世相を考える素材として、貴重かつ優れた資料群といえるのではないだろうか。

しかし、同時にそれが、「一人の人の所有に属する全物品を調べ上げると、その人の性格なり傾向なりの特徴がありありと出てくる」（今 1971: 347）、つまり、特定の人物の人生を綿密に跡付けることが可能な記録、個人情報という側面を有していることには十分注意が必要である。その人が有名であればある程、また、こうしたかたちで

資料の収集が徹底的に行われれば行われる程、その公開や活用には格別の配慮が欠かせなくなる。ジョン・エンブリーが、戦前の熊本・須恵村の調査で収集した生の資料は、すべての関係者が亡くなるまでは、コーネル大学記録保管所に封印されて置かれることになったというが（スミス・ウィスウェル 1987: 7）、今回の収集資料に関しても、同様の措置が必要となることも十分あり得る。

しかし、仮にそうしたかたちで公開や活用に何らかの制限が加えられたとしても、それによって資料的価値が大幅に減ってしまうわけでは必ずしもない。近年は、博物館の同時代的な利用者への便宜供与ばかりが強調される傾向があるが、こうした問題に関しては長期的視野に立って判断を下すことが重要となろう。博物館や、博物館が収集保管する資料やデータは、同時代の人々や社会のためだけに存在しているのではない。それらは将来の人々や社会のためのものである。将来的な活用が想定できるのであれば、それは、博物館としてそれらを収集保管する十分な理由となると考えるべきである。

無論、公開や活用問題は、すべて時の経過が解決してくれるというわけではない。一通り整理が済んだ大村しげコレクションを今後どのように公開し、利用に供していくのか、そのより良いあり方についても更に検討する必要があることはいうまでもない<sup>5)</sup>。

## 注

- 1) 今和次郎の問題意識を受け継ぎ、生活財生態学と称して家庭にある物品の種類・量・配置の景観等の状況を悉皆的に調査し、詳細に分析を行った CDI の取り組み（CDI 1976）とも、その資料収集の考え方は通じるものがある。
- 2) 以下、敬称は略した。
- 3) 実測調査は、民博民族文化研究部・佐藤浩司氏に依頼し、実施した。
- 4) 『季刊 民族学』94号では、「おぼんざいの台所から」という特集が組まれていて、その内容は、基本的にはそうしたイメージに沿ったものとなっている（千里文化財団 2000: 101-115）。
- 5) 本稿は、笹原亮二「ある女性の暮らしと生活の品々——故大村しげ氏の寄贈資料の収集と整理を巡って——」（笹原 2001）に加筆訂正を加えて作成したものである。

## 文 献

大村しげ

1997 『ほっこり京ぐらし』京都：淡交社。

今和次郎

1971 『考現学 今和次郎集第1巻』東京：ドメス出版。

笹原亮二

2001 「ある女性の暮らしと生活の品々——故大村しげ氏の寄贈資料の収集と整理を巡って——」『民博通信』93: 136-142。

2002 「京都のおばあちゃんの部屋」*Japan, Our Closer Neighbor*, Soul: The National Folk Museum.

CDI

1976 『生活財生態学——家庭における商品から見たライフスタイルの研究——』。

千里文化財団

2000 『季刊 民族学』 94。

福田アジオ

1992 「民俗学の動向とその問題点」『日本民俗学』 190: 1-13。

ロバート・J・スミス／エラ・L・ウイスウェル

1987 『須恵村の女たち』 東京：御茶の水書房。